

利根・沼田の教育

発行所 利根教育事務所
 発行人 大竹 孝夫
 〒 378-0031 沼田市薄根町 4412 番地
 TEL 0278-23-0165 FAX 0278-23-0180
 E-mail : tonekyou@pref.gunma.lg.jp

「自ら考える」ということ

利根教育事務所 管理主監 横坂 隆司

落語家の初代林家三平さんの小話に次のようなものがあります。ラーメン屋が三軒並んでいました。右端の店が「日本一うまい」と看板を出しました。すると、左端の店も負けじと「世界一」の看板を出しました。困ったのは、真ん中の店主です。寝ないで考え、次のような看板を出しました。「入り口はこちら」

現在、教育においては、自ら考え、主体的に判断し、問題をよりよく解決していく資質・能力の育成が大切だとされています。落語の話はさておき、昨年度勤務させていただいた小学校で、実際にあったことを紹介します。

朝、始業前に、校庭の隅でプランターの花に水をやっていると、全校の児童に対し、次のような放送がありました。「今日の朝行事は、マラソンです。体育着に着替える必要はありませんが、赤白帽をかぶって外に出てください。教室にいる人は、誰かこのことを黒板に書いておいてください」

すると、プランターの向こう側にある1年生の教室の中から私を呼ぶ声が聞こえました。窓の方へ行ってみると、1年生の教室にはすでに全員の児童がそろっていました。その中の一人が、先ほどの放送について質問してきました。それを聞いて驚きました。なんと「黒板に書かなくていいですか」と聞いてきたのです。

驚いた一つ目の理由は、放送の言葉の裏側を読んでいることです。『黒板に書きなさいと指示された』→『まだ登校していない友達に知らせるためである』→『1年生は全員登校している』→『黒板に書く必要はない』と考えたのだということがわかります。

二つ目の驚きは、自分で判断した結果を聞いてきたことです。「どうしたらいいですか」と指示を仰ぐ聞き方ではなく「黒板に書かなくていいですか」と自分の判断が正しいかどうかを聞いてきたのです。「どうしたらいいですか」という聞き方と比べると数段上のレベルです。小学校1年生でも、「自ら考え、判断する力」が備わっているのです。

昨年の東日本大震災以来、災害から自分の身を守るためにも、「自ら考え、行動する力」の育成に力を入れている学校が増えているという話を聞きます。子どもたちが潜在的にもっている「考える力」や「判断する力」や「表現する力」を意図的・計画的に伸ばすことは、教育に携わる者に課せられた大きな課題のひとつです。

冒頭の店主以上の知恵を出す子どもがたくさん育つことを願っています。

生涯学習係

講師派遣により、学校の各種研修を応援します !!

利根教育事務所では、社会教育主事、青少年育成コーディネーターを学校等における各種の研修会等に講師として派遣する「社会教育主事等派遣事業」を行っています。

事例紹介 「ケータイ・インターネットの危険性」(於：沼田中学校)

7月、保護者を対象に「子どもにケータイ、本当に大丈夫」というテーマで講演を行いました。子どもが巻き込まれた昨今の事案から、インターネットに接続できる携帯電話やポータブルゲーム機の危険性と回避方法を知らせるとともに、携帯電話やゲームよりも「家族や友達との会話」「自然体験や社会体験」「勉強スポーツ・読書」などを大切に呼びかけました。参加した保護者から「子どもたちにも学ばせたい。」という声があり、その後、中学校3年生を対象に「賢く使おう、ケータイ・インターネット」というテーマで講話を行いました。ルールやマナーはもちろん、携帯電話やインターネットに対する考え方も身に付ける機会となりました。



《参加者の感想等から当事業を活用した本研修会のメリット》

- 1 学校の生徒指導や情報教育の方針に合わせた内容の研修が行える。
- 2 学校の方針等に対して、理解や協力を得るのが難しい保護者にも、第三者の講師が客観的なデータを示しながら説明すると受け入れてもらいやすい。
- 3 正しい知識を伝えると同時に、明るく前向きな生き方を提案するので、家庭の教育力の向上や、子ども・学校・保護者の良好な関係づくりの一助となる。

今後も、学校教育、社会教育共通の喫緊の課題である、情報モラル、家庭教育、人権教育や学校支援センター等についての講義・講演やワークショップを行います。多様な学習機会に対応できるよう、教員向け、保護者向け、児童生徒向けのコンテンツを準備して、学校を応援していきたいと考えています。

問題解決的な学習は、子どもたちが主体的に学び、思考力・判断力・表現力を身に付けていく有効な学習方法の一つです。管内の先生方は、問題解決の過程を大切に授業実践をされており、導入場面で子どもたちの意欲を高めるために、次のような工夫が学校訪問等で見られました。

導入場面で、子どもの「知りたい」「やってみたい」「できそうだ」という気持ちを高める工夫（学校訪問等で参観した授業から）

- ① 予想と異なる事例を意図的に示して、疑問をふくらませる
- ② 体験活動や身近な事例と関連させて、興味・関心をもたせる
- ③ 既習事項と課題との共通点や相違点を明確にして、見通しをもたせる

ここでは、特に①について、小学校第4学年・理科「金属、水、空気と温度」の水の温まり方について学習する授業場面を具体的な事例として示していきます。

授業者の意図

今回は、子どものはじめの考えとは異なる内容を含んだ「事象提示(演示実験)」をすることで、子どもの疑問をふくらませて、「知りたい」という気持ちを高められるようにします。


はじめの考えをもたせる


今日は、水を熱するとどのように温まるのか、これまで学習したことをもとに考えてみましょう。

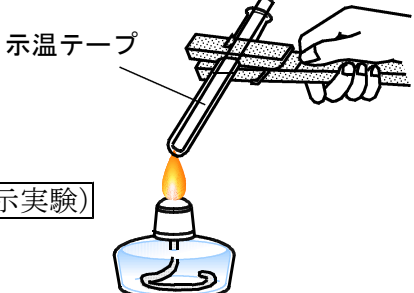
水も金属と同じように、熱したところから順に温まって、やがて全体が温まると思います。

では、水を入れた試験管を金属棒と同じように下の方から熱してみましょう。示温テープには、どんな変化が見られると思いますか。

金属と同じように、熱したところから順に示温テープの色が変わっていくはずですよ。







はじめの考えと異なる事象を示す

あっ！下の方と上の方だけが先に温まったよ。どうしてかな？


火に近いところから、だんだんと温まると思ったのに、不思議だね。


水を熱した時の様子から、どんなことが考えられますか。


水は金属と違う温まり方をするんですね。

水は温められると、まず、上に動くのかもしれないね。その後はどうなるんだろう。

水全体がどのように温まっていくのか、早く知りたいね。







疑問をふくらませる

子どもの「知りたい」「やってみたい」「できそうだ」という気持ちを十分に高めて問題の解決に取り組ませることで、意欲をもって主体的に学習に取り組み、知識や技能を活用して思考力・判断力・表現力を身に付けていくことができます。